奄美大島の自然と文化

奄美群島国立公園

琉球諸島の一部である奄美群島にまたがる奄美群島国立公園は 2017 年に設立されました。地質学的には、琉球諸島は過去 1000 万年にわたって日本およびユーラシア大陸と陸続きになったり離れたりを繰り返し、約 200 万年前に最終的に分離しました。このような変遷により、アマミノクロウサギ、ケナガネズミ、オビトカゲモドキなど多数の固有の動植物種が孤立した環境で進化しました。これらの固有種の一部は、絶滅が危惧されているだけでなく、日本にもアジア大陸にもすでに見られない特徴を持つ残存種でもあります。奄美群島国立公園は、これらの固有種を保護し、奄美群島の文化を守る上で重要な役割を果たしています。

奄美群島には、サンゴ礁に囲まれた特徴的な海岸線、山地、亜熱帯性常緑広葉樹林、平地、奇岩といった様々な地形が見られます。奄美群島の各島は沖縄と九州両方の伝統から要素を取り入れた独自の文化を持っているものの、全ての島の文化は自然環境と密接に結びついた生活様式という共通点で繋がっています。

山の多い島

もともとは火山だった奄美大島は、その 712 平方キロメートルの面積のほとんどが樹木に覆われた山地で、農業に適した平地はわずかしかなかった。険しい海岸線のところどころに入り江や岬が見られます。多くの場所では、風景の中心を占める山々の斜面が海まで伸びており、印象的な景観を形作っています。

希少な植物相と動物相

奄美大島には、琉球諸島の固有種に加え、奄美大島のみで見られる種も複数生息しています。その中には、島の亜熱帯性樹林をすみかとするアマミトゲネズミとアマミイシカワガエルが含まれます。シイの木やアラカシが茂る森林は、絶滅危惧種であるシリケンイモリなどの生息域です。この地域の動物で最も有名なのは、おそらく奄美大島と徳之島だけに生息する夜行性のアマミノクロウサギです。この毛色が濃く比較的ずんぐりとした動物は、短い脚と穴を掘るために発達した爪を持ち、かつてアジア大陸に広く分布していた古代のウサギの形態を残していると考えられています。1 年に 2 度出産しますが、ウサギには珍しく 1 度に生む子の数は 1 頭または 2 頭です。アマミノクロウサギは、かつて毒蛇であるハブの根絶を目的に島に連れてこられたマングースによって数が減ってしまいました。マングースはハブだけでなくアマミノクロウサギなどの固有種を多数捕食しました。幸い、奄美マングースバスターズがこの侵入捕食種の多くをすでに駆除し、島の生態系のバランスを復活させるための取り組みを行っています。しかし、野猫もまた、アマミノクロウサギだけでなくルリカケスなどの他の固有種の生存を脅かす脅威です。

自然と調和した暮らし

奄美大島の集落の多くは入り江に作られており、島民は昔から森と海の恵みに頼って暮らしてきました。自然への深い畏敬の念は今も変わらず、環境と調和しながら暮らすことが大切にされています。たいていの集落は、神々が山から海に向かって通る経路であると言われる「カミミチ」(神の道)を守っています。人々は皆、木や植物、食物を採る時には自然に感謝を捧げ、森に入る時には神々に祈りを捧げます。島の祭りは自然に深く根ざしたものです。その中には、女性司祭たちが岩の上で舞い、豊穡を祈願する秋名集落の平瀬マンカイなどがあります。

見どころ

奄美大島には訪れることができる数多くの素晴らしい自然の見どころがあります。カヤックが楽しめる住用のマングローブの森、島の最高峰・湯湾岳(標高 694メートル)を覆う原生林はその一部に過ぎません。ゆったりと自然散策をしたい人には、金作原原生林と奄美自然観察の森が島の生態系を体験するのにぴったりです。